



# 弘前城シンポジウム

～天守曳家・石垣解体修理がもたらしたもの、  
そしてこれからの保存と活用を探る～

令和8年1月25日[日] 13時～17時  
弘前文化センター(大ホール)

申込不要  
参加無料

## 1部 天守曳家・石垣解体修理がもたらした歴史的価値

13時～

- |                          |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| ① 発掘調査で発見された遺構と遺物        | ● 弘前市公園緑地課弘前城整備活用推進室  |
| ② 弘前城本丸石垣修理の歴史－元禄から令和まで－ | ● 弘前城跡整備指導委員会委員長 福井敏隆 |
| ③ 考古学から見た弘前城の価値          | ● 弘前大学人文社会科学部教授 関根達人  |

## 2部 弘前城のこれからの保存と活用

13時～

- |                             |                          |
|-----------------------------|--------------------------|
| ④ 私の大好きな弘前城の魅力(トークショー)      | ● りんご娘 はつ恋ぐりん            |
| ⑤ ボランティアガイドから見る弘前城の魅力と活用(仮) | ● 弘前観光ボランティアガイドの会会長 櫻庭全一 |
| ⑥ 観光コンテンツとしての弘前城            | ● 弘前観光コンベンション協会事務局長 白戸大吾 |
| ⑦ 弘前城のこれからの保存と活用            | ● 弘前市公園緑地課               |

主催 弘前市 [問い合わせ 公園緑地課 TEL 0172-33-8739]

後援 青森県教育委員会 弘前市教育委員会 弘前商工会議所 弘前観光コンベンション協会  
弘前市物産協会 FMアップルウェーブ 弘前文化財保存技術協会  
東奥日報社 陸奥新報社 青森放送 青森テレビ 青森朝日放送 NHK青森放送局





写真1 如来瀬石切丁場跡の石材

## 石材の切り出し

慶長16年(1611)の弘前城築城時、本丸の石垣は一部分が天端まで築かれておらず、完成は築城から約90年後の元禄12年(1699)5月で弘前藩4代藩主津軽信政の時でした。

当時、石垣に使う石材は岩木山麓の如来瀬から切り出されたと「弘前藩庁日記」に記され、現在も如来瀬石切丁場跡では矢穴の痕跡がある石が確認できます。(写真1)

9代藩主寧親の時には、蝦夷地警備の功績が認められ、文化7年(1810)に隅櫓改築の名目で現存する天守が天守台石垣とともに造営されます。



写真2 大正の石垣修理

## 明治の石垣崩落～大正の修理

元禄の普請から約200年後の明治27年(1894)と明治29年(1896)、天守台北側の石垣が崩落。明治29年の崩落の際は翌年に大工棟梁の堀江佐吉が天守を曳家し、大正4年(1915)に石垣の積直しと天守曳戻しが行われます。(写真2)

## 平成～令和の石垣解体修理

弘前市は、大正の修理から約70年後の昭和58年(1983)5月の日本海中部地震を契機として本丸石垣の定点観測を行う

など、石垣の変位を調査。

その結果、石垣の孕みが進行し(写真3)、崩落の危険性が指摘されたことから平成23年(2011)に解体修理を決定、平成26年(2014)に内濠を埋め立て、平成27年(2015)には天守曳家、そして翌年から解体工事に着手します。

## 発掘調査で新たな発見

工事は、平成30年(2018)に終了し、最終的には2,185石を解体しました。解体中には発掘調査も並行して行われ、井戸跡や排水跡、埋没石垣などの多くの新発見がありました。



写真4 新たに発見された埋没石垣



写真3 解体前の孕んだ石垣

井戸跡は、二重の木製枠でその間には意図的に砂が埋設され壁からの流入水をろ過する働きがあったと考えられています。

排水跡は、本丸での生活排水等を石垣中段の蛇口から内濠へ流した施設で、樋を埋設したものと石製暗渠のものがあり、石製暗渠のものは元禄7年から12年(1694～1699)の石垣積み足しと同時に築かれ、19世紀以降に作り直されていることが判明しました。

埋没石垣は、解体範囲の北端に位置し、自然石を積み上げた「野面積み」という積み方で築造されたもので、元禄期の石垣より前のものです。出土遺物や絵図などの史料から17世

紀中頃から寛文13年(1673)の間に築かれた石垣と考えられています。(写真4)

## 天守と石垣の耐震補強

天守並びに石垣の復旧にあたっては、耐震性の強化が必要となり、天守基礎の耐震化とともに天守下の石垣にはジオテキスタイルという現代工法を導入することになりました。令和3年(2021)6月からは石垣の積み直しに着手し、4年の歳月をかけて完成します。(写真5)

令和8年(2026)には、いよいよ11年ぶりに天守が本来の位置に曳戻されることとなります。



写真5 藩政期の勾配で積み直された石垣